

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：13701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16720

研究課題名(和文) 唐代の異文化認識と左遷文学の研究

研究課題名(英文) A Study of Perceptions of Other Cultures and Literature of Demotion in the Tang Dynasty

研究代表者

好川 聡 (YOSHIKAWA, Satoshi)

岐阜大学・教育学部・准教授

研究者番号：10456816

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、これまでの研究成果 中唐の異文化認識 を発展させて、唐代の異文化認識の全容を解明することを目指した。まず、初唐の詩人が、南方独特の風土に関心を示した詩を作りはじめ、盛唐になると杜甫によって、南方異民族の風俗にも着目した詩が数多く作られるようになり、それが中唐へと受け継がれていく流れを明らかにした。また、中唐の韓愈は、最初の左遷で異文化認識が変化したことが、二度目の左遷に際して、左遷の悲哀を克服するのに大きな役割を果たしたことを考察した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to elucidate a comprehensive overview of cross-cultural understanding during the Tang dynasty by expanding on existing research findings on cross-cultural understanding during the middle Tang dynasty. First of all, poets in the early Tang began writing poems that indicated interest in the distinct climate of the south, and during the high Tang, the poet Du Fu began writing numerous poems that were focused on the different ethnic groups in the south. This study clarifies the process by which this trend was carried into the mid Tang. In addition, regarding Han Yu in the mid Tang, it was observed that changes in his cross-cultural understanding due to his first demotion played a major role in helping him overcoming sadness at the time of his second demotion.

研究分野：中国古典文学

キーワード：唐代文学 唐詩 異文化 左遷

1. 研究開始当初の背景

中国の長江流域以南は様々な異民族が住み、風土も黄河流域の中原地域とは大きく異なっていた。そのため、唐代より前は“蛮夷”という言葉の下、その南方独特の自然や風俗はほとんど無視されていた。それが唐代になると、徐々に注目され始め、中唐に至ってさかんに詩に描き出されるようになる。こうした左遷時期の文学に着目する研究は、日本に限らず中国でも近年特に関心が高まっており、中国では「貶謫文学」と呼称されている。中でも尚永亮氏は、『貶謫文化と貶謫文学—以中唐元和五大詩人之貶及其創作為中心—』（蘭州大学出版社 2004）や『唐五代逐臣与貶謫文学研究』（武漢大学出版社 2007）等、多くの専著を公刊しており、資料面の整備や周辺事象の考察が、氏の詳細な論考によって整備されている。ただその一方で、個々の作品に対する踏み込みは浅くなっており、中唐を代表する五大文人 韓愈、柳宗元、劉禹錫、白居易、元稹一の異文化認識に対する理解は、彼らのいずれもがその風土風俗を嫌悪していたとするのが基本的な論調であった。

これまで研究代表者はこのテーマに着目して、中唐の五大文人が左遷された際の一つ一つの作品を深く読み解くことを通じて、中唐の文人達が最初は南方の風土風俗を嫌悪しつつも、徐々に理解を示していったことを明らかにしてきた。例えば元稹は、江陵（湖北省）左遷当初は嫌悪感しか示さなかったのが、その地にたくましく生きる民衆の姿に気付くことを通じて、次第に異文化の魅力的な面を描くようになる。そして通州（四川省）左遷後は、江州（江西省）に左遷された白居易との詩のやり取りを通じて、蛮夷の地域ごとの個性の差をも認識するようになった。また、従来の中国古典文学における異文化認識の研究は、その「異」なる特徴という観点からしか研究されなかったが、劉禹錫の有名な「竹枝詞」の序文に新たな意味を読み取り、異文化でも本質は「同」じだと認める観点から、劉禹錫が異民族の風俗といってもその本質は変わらないという意識が働いており、それ故どの土地でも見られる日常生活の光景も描き出される点を明らかにし、はじめて劉禹錫の異文化認識の本質を説き明かした。本研究はこれらの研究成果を発展させて、唐代全体に視野を広げて研究を進めていく。

2. 研究の目的

中唐の五大文人にとどまっていた研究を、初唐、盛唐、晩唐へと視野を広げ、唐代の異文化認識の全体像を明らかにすることを目的とする。さらに異文化認識を足がかりにして、異文化認識の差が左遷時期の文学全体にどういった影響を与えているのかを検討

していく。

3. 研究の方法

異文化認識の変遷について、まず六朝の詩を調査し、唐以前はほとんど無視されていたとされる南方独特の風土や風俗を描いた作品の有無を確認する。初唐では、沈佺期や宋之問などが嶺南に左遷された際の作品を足がかりに、唐代において異域への関心がどのように芽生えていったかを考察する。盛唐では、特に杜甫の詩に着目する。杜甫は、中唐の韓愈、白居易、元稹らによってはじめて評価され始める詩人であり、彼らの文学に多大な影響を与えている。杜甫の夔州（重慶市）滞在時に詠んだ詩を丁寧に読み解いていくことを通じてその特徴を明らかにし、中唐文学との関連性を考察する。中唐では、これまで研究してきた五大文人以外に目を向け、彼ら以外の文人達の異文化認識にも視野を広げる。晩唐は、李商隠や韓偓など、南方異域の赴任した詩人たちの作品を調査していく。このように各時代の特色を比較することで、唐代全体でどのような異文化認識の方向性が認められるかを明らかにしていく。

左遷文学については、唐代全体に研究範囲を広げると問題が拡散して収拾が付かなくなるので、まずは研究や訳注編集の蓄積がある韓愈に絞って考察をすすめていく。

4. 研究成果

研究成果を六朝・初唐・盛唐・中唐・晩唐の順に下記に記す。

(1)六朝時代でも、多くの士大夫が南方に地方官として赴いていたが、南方独特の風土風俗を詩に表現することはほとんどなかった。その原因として単純に南半分しか領有していないため、地域差をあまり感じなかったこと、おどろおどろしい風土は「宮体詩」など当時流行した艶麗な詩風にそぐわなかったことなどがあげられる。ただ、『文選』に収められる鮑照の「苦熱行」では、南方の過酷な自然環境が羅列されており、初唐の嶺南描写の語彙に大きな影響を与えている点が注目される。しかし、鮑照はこの詩で描かれるような南方の僻地に赴いたことはなく、その表現も様々な文献に基づいたものであり、実際の体験にもとづいて作品を作ったわけではないことが分かる。

(2)初唐においては、武則天の退位に伴って、多くの宮廷文人たちが嶺南地方に左遷されるが、宋之問の「端州の駅に至りて杜五審言・沈三佺期・閻五朝隠・王二無競の壁に題するを見て慨然として詠を成す」では、左遷された詩人たちが道中の同じ場所でこぞって詩を書きつけており、自分一人が瘴癘の地

で苦しんでいるわけではないと互いに詩を共有することで、同じ左遷の悲哀を和らげている。その宋之問や沈佺期は、異域独特の風土に着目した詩が見られ、こうした異域描写は当時の文壇からは傍流にあたる下級官僚（「宦遊」といわれる地方官）によってもたらされた新しい分野の一つである。その表現は、基本的には唐以前の詩と同じく、過去の文献に拠っており、その風土風俗を嫌悪するものであるが、沈佺期は「椰子の樹に題す」の中で南方特有の樹を、宋之問は「始安の秋日」の中で桂林の独特の山の形状を、自分の感覚に基づいて表現しており、中唐の文人たちの詩作に対する姿勢と通じるところがある。ただ、中唐のもの比べると、その表現は異文化にまでは踏みこんでおらず、唐代の中で段階的に異域描写が深まっていくさまが見てとれる。(1)(2)の研究成果を論文にまとめて公表した。

(3)杜甫が夔州の土着の風俗を扱った作品については、劉禹錫の「竹枝詞」に影響を与えた「夔州歌十絶句」が有名であるが、他にも夔州の地に暮らす男女の生活を描いた「負薪行」や「最能行」、雨乞いのための山焼きという楚の風俗を詠った「火」、ユーモアをこめて夔州の風俗を描いた「戯れに俳諧体を作り悶を遣る二首」など、数多くの作品の中で夔州の風土風俗に言及している。なかでも、「獠奴阿段に示す」は、異民族である獠族の、しかも童僕子の名前を詩題に出して謝意を表している点で注目される。阿段は杜甫の他の詩にも見え、杜甫がこうして異民族との交流を詩のテーマとしていることは、中唐の文人たちが左遷地で異域の風土風俗を描いた作品に大きな影響を与えている。

また、杜甫や李白をはじめとする唐代の詩を精読していく中で、従来の詩人で時代を区切るという文学史ではなく、安史の乱を契機に李白と杜甫が詩の本質的な変化を起こしているという大きな問題を発見し、学会で発表を行った。盛唐・中唐という時代区分や、李白・杜甫は盛唐の詩人（または、李白 盛唐、杜甫 中唐）という枠組みを取り払って考えてみると、未編年から編年へ、いいかえると、現実と切り離して詠う型から、自身の人生や社会と深く関わる現実報告型への詩の変革は、安史の乱を契機にして起こっており、それが中唐元和期、宋代の文学へと引き継がれていくことを論文にまとめて学会誌に発表した。

(4)中唐では、韓愈について、川合康三・緑川英樹・好川聡編『韓愈詩訳注第二冊』（研文出版、全五冊）の編集作業にあたり、二〇一七年の十月に刊行した。また、韓愈の研究会の中で、第三冊に収録される詩（『韓昌黎詩繫年集釋』の編年で元和元年（806）の途中から元和五年の詩まで）と、第四冊に収録される詩（元和六年から十一年まで）の半分

の検討を終えることができた。

韓愈の左遷文学については、陽山左遷時には蛮夷の風土に対して嫌悪しか示さなかったのが、長安帰還直後に陽山を回想した「張徹に答う」では、その地の特異な自然を飽きるまで楽しんだと述べており、その認識が変化している。韓愈は長安帰還後に「南山詩」（204句）や「城南聯句」（306句）などの大作を次々と作り、それまでの文学の枠組みを壊すような文学表現の挑戦を行っており、左遷から帰還後にその文学を開花させている。こうして自己の文学を豊穡に、多様化させていったことが、十数年後の潮州左遷時には、地元の役人にやりこめられる「灌吏」や、ゲテモノをテーマとした「初めて南食し元十八協律に貽る」や「柳州州（柳宗元）が蝦蟇を食らうに答う」などを作り、みじめな自分を作品化してそれを面白がっている面が見られることへと繋がっていく。左遷の悲惨な体験をも詩のテーマにしてある種楽しみを覚えているわけであり、従来の悲哀に沈むのとは異なる、新たな左遷文学を創り出している。

また、中唐の五大文人以外の異域の描写については、主に韓門弟子たちの作品を調査した。特に張籍は異域を詠う「蛮中」「蛮州」や、異民族の風俗をテーマにした「崑崙児」という詩、また「南遷の客を送る」詩の「海国 戦には象に騎り、蛮州 市には銀を用う」や「海南の客の旧島に帰るを送る」詩の「竹船 桂浦に來たり、山市 魚鬚を売る」など、送別詩の中で異域の文化風俗に着目した詩句がまま見られ、韓愈との影響関係も興味深い。

(5)晩唐に至ると、李德裕や呉融、韓偓など南方に左遷された詩人は多いが、その地独特の風土や風俗に着目した作品は少なく、目新しさは見られない。これは晩唐の詩人たちが、中唐五大文人と比べるとスケールが小さく、晩唐という時代の風潮が退廃的、耽美的であったため、異域の独特な風俗を開拓するまでには至らなかったからであろう。ただ、こうした時代の中でも、李商隱が「異俗二首」という嶺南の風俗を正面から取り上げた作品が見られるのは、鋭い感性を持つ李商隱ならではといえる。李商隱は他に「桂林」詩の中でその独特の山並みに注目した詩句も残している。その桂林は初唐の宋之問から、杜甫、白居易など様々な詩人に言及される土地で、その流れを追うと風光明媚な観光地が形成されていく過程を見て取ることができる。

このように、これまでの研究成果と今回の調査・研究を加えることで、中唐元和期を頂点とする、唐代文学全体の異文化認識の変遷を明らかにした。以上の中で未発表のものは順次論文にして公開を進めていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

好川聡、唐詩變革 安史の亂前後に於ける李杜の詩から、日本中国学会報、査読有、第68集、2016年、pp32-46
<http://nippon-chugoku-gakkai.org/utf8/hpkeisai/68/68-03.pdf>

好川聡、初唐の嶺南描写—沈佺期、宋之間を中心に、岐阜大学国語国文学、査読無、第42号、2017年、pp31-47

〔学会発表〕(計1件)

好川聡、『唐詩変革』、日本中学学会第67回大会、2015年10月10日、國學院大學(東京都・渋谷区)

〔図書〕(計1件)

川合康三、緑川英樹、好川聡編、研文出版、韓愈詩訳注第二冊、2017年、pp565

6. 研究組織

(1) 研究代表者

好川 聡 (YOSHIKAWA Satoshi)

岐阜大学・教育学部・准教授

研究者番号：10456816